

高知ピアサポートセンターにお邪魔して

中高年ひきこもり当事者
ぼそっと池井多

5月29日、高知県ピアサポートセンターへ伺い、ご当地でピアサポーターとして活躍している方々から詳しいお話を聞くことができました。とても勉強になりました。

関東に住んでいる私は、正直をいうと、ピアサポートという制度に良い印象を持っていませんでした。それはまず、私の周囲でピアサポーターという資格を名乗る人に自分の悩みを話したくなかったことは一度もない、という個人的な実感によります。

逆に、ピアサポーターなどという資格を持っていなくても、

「この人になら悩みを話せる」

「この人には話を聞いてもらいたい」

と思う人は他にたくさんいます。

また、ピアサポートという制度などなくても、ピアサポート以上のクオリティと実効性を備えた人間的交流は多く存在することを経験的に知っているためでもあります。



そこで私は、ピアサポートという概念にこのような結論を与えていました。

「ピアサポートという行為は、ピアサポーターという資格を持つ者がいて始まるのではなく、人と人との間に自然にピアサポートと呼べる状態が起こったときに、そのステークホルダーが結果的に『ピアサポーター』と呼ばれるのにすぎない」

だから、厚生労働省が「ピアサポート制度の充実」などということ、まったく奥行きを感じさせない政策の言葉として今後のひきこもり支援の柱として掲げていることに、私はさかんに鼻白んでいるのです。

「現場を知らないでもっともらしいことばかりいう専門家ばかり集めているから、そんな施策を打ち出してしまふことになる。ひきこもり支援をどうするかという問題を真剣に考えたいのなら、厚生労働省はもっと体制に順応しない、順応できないひきこもり当事者に意見を聞くべきである」

などとあちこちで言わせていただいているのもそうした理由によるものです。

しかし今回、お話を伺ったかぎりでは、高知においてはピアサポートという概念が本来的に目指すものができるだけ誠実に実践されようとしているようでした。ここでいう「誠実に実践される」とは、何も経過と結果においてひきこもり支援の理想が瞬時にして実現される、などといった意味ではありません。たとえば、「ピアサポートが制度化された瞬間から、ピアサポーターと一般当事者のあいだに階級差が生まれ、ピアサポーターという資格を持つ人は一般当事者ではなくなってしまう」

といった、関東で起こっている「ピアサポートの制度化にまつわる根本的問題」は、やはり高知でも起こって

いるようでした。

けれども、こうした問題はこの地でピアサポーターとして活動する方々の苦勞と努力によって、その度ごとになんとか乗り越えられているようでした。そこにあるのは、マニュアル化などできないくらい臨機応変で微妙な対応です。となると、これは方法論(メソッド)ではなくむしろ精神(スピリット)の産物であると申した方がよいのでしょうか。

したがって、もし高知におけるピアサポートの成果というものを語るとしたら、それは出発点においてピアサポートやスーパービジョンといった「制度」がもたらした産物ではなく、ピアサポーターとして活躍している方々の「人」が生み出している何かであると言えると思います。

でも、まったく制度的な支えなしに現場のピアサポーターだけに負担を強いていたら長続きはしません。そこで初めて「制度」が出てくるのです。

高知では行政もピアサポート活動を積極的に後方支援しています。これはシステムや制度に属する問題です。行政はピアサポーターとして活動するひきこもり当事者・経験者の方々に、最低賃金レベルの給金を払ってくれるようです。

その点においては、

「ひきこもり支援は行政がやるから、お前たちひきこもり当事者は引っ込んでいろ。そんなに活動したいのなら、さっさと働いて所得税を納めろ」

と言わんばかりに当事者活動を無視したり、当事者活動と無意味な競合をしてしまうような、私が住んでいる自治体とは雲泥の差があると言わなくてはなりません。

福祉分野に限らないかもしれませんが、政策的なことに関して、とかく人は制度を表面的に模倣するだけでその制度を導入した気になってしまうものではないでしょうか。ところが現実には、それでは何にもなっていないのです。ちがう人が同じように動いても、たいてい同じ結果にはなりません。

では、何が制度の実効性を決めているかといえば、繰り返しになりますがやはりそれを動かしている「人」だと思います。これらの「人」は、ときには自らが作った制度にこだわることなく、それをはみ出したり崩したりしながら大胆に動いていきます。ところが、いつけん制度に反するようなこうしたダイナミズムが現場に許されるからこそ制度は機能し、逆に制度を遵守しようと現場が硬直してしまうと、制度は枯死して機能しなくなるということがあると思います。

現在、ひきこもり支援のマニュアル化といった政策を考えている中央の方々には、平面的なマニュアル化ではすくいとることのできない、流動的で立体的な「制度」と「人」の力学にも一考を与えていただきたいものです。

こうした高知の「人」を生み出す背景には何があるのでしょうか。歴史好きの私ならではの見方かもしれませんが、やはり幕末の土佐藩の活動や明治期の自由民権運動にもつながる、熱血でおおらかな南国の気風がここにもあると思えてなりませんでした。(了)